

第2回国立市介護保険運営協議会

令和元年5月22日（水）

【林会長】

こんばんは。定刻になりましたので、第2回の国立市介護保険運営協議会を始めたいと思います。

まず最初に、議事録の承認をしていただきたいんですが、事前に送付した議事録、4月19日に開催しました第1回の運営協議会の議事録がお手元に届いているかと思うんですが、何かお気づきの点ございましたでしょうか。

事務局、お願いします。

【事務局】

事務局のほうから、申しわけないんですが、送付させていただいた後、気づいた部分は何点かございまして、訂正させていただきます。

まず議事録の5ページ目なんですけれども、5ページ目の下のほう、山地委員のご発言の2行目なんですけれども、「今までずっと介護保険運営協議会の事務局長」と書いてあるんですけれども、「介護保険運営協議会には」の間違いでございますので、「の」から「には」に訂正をさせていただきたいと思います。

それから、8ページの下から10行目の大井委員のご発言でございます。大井委員の「大井です」から始まる場所なんですけれども、「事務担当者以外で、例えば、穂積さんて」のくだりなんですけれども、まず「穂積」の漢字が稲穂の「穂」に「積」と書いてあるんですが、保育園の「保」に「泉」になります。そのちょっと下の地域包括ケア推進担当課長の発言にも同じ誤植がございまして、「穂積は嘱託職員になりますので」の「穂積」も同じように「保泉」という形になります。

それから大井委員のご発言に戻りまして、「例えば、穂積さんて地域生活でいらっしやいましたよね」とあるんですが、「地域生活」ではなくて「地域包括」の誤りでございます。

それから、最後になりますが、すみません、19ページまで飛んでいただきまして、19ページの上のほうの大井委員のご発言でございます。「今、ひらや照らす、コーヒーじゃないですけど」というご発言がありますが、「コーヒー」ではなくて「カフェ」の誤りでございます。「今、ひらや照らす、カフェじゃないですけど」に訂正をさせていただきます。

事務局のほうからは以上になります。

【林会長】

ありがとうございます。

今、事務局から指摘された点以外に何かお気づきの点はございますでしょうか。

ないようでしたら、今の点を訂正で、この議事録を承認ということでよろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

【林会長】

ありがとうございます。それではそのようにさせていただきます。

それから、会議次第に沿って参りますが、2番目が検討部会報告であります。では事務局からお願いします。

【事務局】

それでは、次第の2番、検討部会報告。5月16日に検討部会を開催させていただき、地域包括ケア計画に掲げられている課題として挙げてあります独居高齢者における包括的支援ということについて、8期に向けて今後の施策展開を考えるとときに、どのように調査・検討を進めていったらいいかというところで、基礎的な調査ものとしてごさいます介護予防・日常生活圏域ニーズ調査等の内容に沿って、一度、既に出ている統計ものごさいますけれども、そこの分析をどのように進めていったらいいかというところで検討をしていただきました。

この介護予防・日常生活圏域ニーズ調査につきましては、新たに今年度実施予定でございますので、それに先立って、前回の28年度に実際に行った調査についての統計を検討しながら、今年度行う調査に追加での質問項目等がもし検討できればというようなところも含めまして、検討部会の皆様に議論をしていただいたところごさいます。

それで、そのときに使った資料としては資料ナンバー8番、こちらを使って、さらに、このときはコンピュータに実際のデータを入れたものを使ってクロスセクションで分析ができないかというところで幾つか試みてはございます。

それでは、もう一度、資料9に戻りまして、報告のほうを続けさせていただきます。

検討部会の概要として、平成28年度に行った介護予防・日常生活圏域ニーズ調査実施報告書の集計データをもちまして、そのデータに基づき、どのような質問項目の結果を組み合わせることで、よりひとり暮らしの、独居の高齢者の方の生活実態の課題を抽出できるのかというところを検討していただきました。

資料ナンバーの8番にございますように、まず調査の概要として、対象者としては、要介護認定を受けている方を除く、要支援の認定を受けている方や認定を受けていない方で75歳以上の方、当時5,853人の方を対象に、郵送で調査票を送付して、それに対して回答をいただいたのが4,526人いらっしゃったというところで、回収率は77.3%でございます。その際に使った調査票、アンケート票、こちらが資料ナンバーの7番になります調査票でございます。

その際に回答していただいた方、年代別、性別の集計がその下に書いてございまして、75歳以上ということで、75歳から79歳が合計で2,106名、男性が853、女性が1,253。80歳から89歳、80代の方が、男性955、女性が1,292、合計が2,247名の方。90歳以上の方が、男性が71名の方、女性が102名の方、合計で173名の方。合計で言いますと、男性で1,879名、女性で2,647名、合計で4,526名ということになっています。

単身世帯の方について検討してみたいということでしたので、その下に、回答者のうち単身世帯の方の数というのをまた集計しております。75歳から79歳の方で、男性93、女性324、合計で417。80代の方で、男性131、女性540、あわせて671。90歳以上の方で、男性27、女性で49、あわせて76名。合計としては、男性で251、女性で913、そして合計が1,164名の方というふうになりました。

こうやって集計をとってみると、女性の方が圧倒的に多かったというようなところがわかります。回答していただいた方ですと、4,526名のうち2,647名が女性の方でしたので、全体の母数でいくと、およそ6割弱、58%の方が女性だったんですが、単身世帯ということで考えると913名の方が女性でしたので、1,164名の方に占める割合でいくと8割弱、78%ぐらいの方が女性だったというところで、一人暮らしということと言うと女性のほうが多かったというところなんです。

この調査票の中で、単身の方の生活実態について集計していくとするとということで担当のほうでまず選んだのが、調査票の間4の(4)、資料7の調査票でいきますと

9ページの(4)「バスや電車を使って1人で外出していますか(自家用車でも可)」という、その調査項目について、1人で外出を「できるし、している」と答えた方が1,023名、「できるけれどしていない」が82名、「できない」と答えた方が53名、不明であったり回答がなかったりした人は6名というふうに出ていました。

資料8の裏面に行きますけれども、次に(5)として「自分で食品・日用品の買い物をしていますか」、こちらについては、「できるし、している」と答えた方が1,085名、「できるけれどしていない」が38名、「できない」と答えた方が32名、不明であったり無回答であった方が9名というところで、こちらも「できる」と回答した方が多かったです。

あともう一つ、戻りますけれども、問2の(8)、こちらは調査票で言うと6ページになります。調査票、資料7の6ページの問2の(8)「外出を控えていますか」。この「外出を控えていますか」については、控えているということに答えた方はどうだったのかというところで見ているんですが、こちらは、外出を控えている方が277名いらっしゃると。このうち、「外出を控えている理由は、次のどれですか」というのがその下にあったんですけれども、病気であったり、障害であったり、足腰などの痛み等の回答をした方がそれぞれこのような人数いらっしゃったと。

そして外出以外のところでは、また戻ります、問4の(6)、これは先ほど見ていただいた問4の(5)の下にあります、9ページになりますが、「自分で食事の用意をしていますか」と、こういう質問もございました。これについては、できるし、自分で用意していると答えた方が合計で1,091名、できるけれどもしていないという方が45名、できないという方が23名、不明であったり無回答であったりした方が5名ということ。

そして問4の(19)、これは資料7の調査票の10ページ目になるんですけれども、「自分で掃除機やほうきを使って掃除ができますか」、こちらについては、「問題なくできる」、「だいたいできる」と答えた方が1,040名、「あまりできない」、「できない」と回答した方が111名、無回答あるいは回答不明という方が13名いらっしゃったと。

といったような、事務局で取り上げた、生活実態に近いであろう問いについてのクロスセクションの分析をしてみた。一人暮らしですと答えた方についての集計をとって見たといったような、この資料を見ていただきまして、幾つか意見を出していただいております。それが資料ナンバー9番の「意見等」というところで、外出や食事の用意など、「できるけれどしていない」という人の理由というのが大事であって、それに対してどのような支援をしていくべきかという検討が必要ですと。次回のニーズ調査では「なぜしていないのか」という設問の設定も検討したほうがいだろうというようなご意見をいただきました。

またあるいは、「できるけれどしていない」という場合に、ヘルパー等の手が入ることで本人ができなくなってしまう可能性もあるので、そうであれば介護保険制度の弊害とも言えるのではないかとといったようなご意見をいただきました。

あと、逆に、なぜできているのか、元気でいられるのかというポジティブな理由も知りたいといった意見もいただきました。

そして、一人暮らしとそうでない世帯との比較をしたほうがよいのではないかとのご意見もいただきました。先ほどの資料8は、一人暮らしの方についての集計というのを出していたというところがありますので、そうでない世帯との比較をしてくださいといったようなところをいただきました。

その次が、フレイル予防のための3本柱である栄養、運動、社会参加と、実際の状態像がどのような相関関係にあるのかという観点でクロス集計をしてみたいというのがございました。これについては、幾つか事務局のほうでやってみた集計が、本日、机上で配付させていただいた資料ナンバー10というのがございます。横長のホチキスどめで6ページあるんですが、こちらの資料ナンバー10の一番最後のページに、地域活動と主観的健康観というのを上げています。

地域での活動についてという問5という質問があるんですが、ボランティアグループであるとか、スポーツ関係のグループやクラブであるとかといったような地域で外出を伴うような活動というのが資料7の11ページに設問があるんですけども、それぞれ、週4回以上出ている、週2～3回出ている、週1回出ている、月に1～3回出ている、年に数回出る、あるいは参加していないといった質問があります。そのほかに、この資料7の14ページ、「現在のあなたの健康状態はいかがですか」というのが、問7の(1)として、「とてもよい」、「まあよい」、「あまりよくない」、「よくない」、そういう設問がございました。

それに基づいて、地域での活動の1週間当たりの回数を、この回答によって、週4回以上ということ、最低限、週4回は出ているだろう、あるいは週2～3回であれば、1週間に2.5回出ているであろうといったような形で大体の回数を集計をとって、それと、主観的ですけども、問7の健康観について、「とてもよい」と答えた人を逆に4として、「まあよい」を3、「あまりよくない」を2、そして「よくない」を1というレベルに入れ直して、右肩上がりであれば、地域活動の回数が増えるほど主観的健康観の度合いが高まっていくのではないかという想定のもとに、実際の集計データをプロットしてみたものというのが、この本日机上配付させていただいた資料ナンバー10番の最終ページのカラーのプロットになってございます。

こちらについては、一応相関関係があるのではないかと思われる右肩上がりのプロット、これは予測値のオレンジ色なんですけれども、地域活動の回数が多いと答えた人ほど主観的健康状態を「とてもよい」に近いほうで回答していると。これは相関的な関係があるということですので、どちらが原因でどちらが結果かということとは言えないと思われるんですが、地域の活動を活発にされている方は、健康観としても、ご自分の健康はいい状態だというふうに回答しているというところが見てとれたということでのクロス集計はしてきました。

そのほかの、一人暮らしとそうでない世帯との比較をしてみてくださいというのがありましたので、資料ナンバー10番、ほかの設問について、幾つか事務局でこれと思った質問について、独居の方と全体との差があるかどうかというのを見てみたのが資料ナンバー10番です。円グラフになっているんですけども、比較対象をさせていただいております。

資料ナンバー10の1ページ目では、設問の間6、「たすけあいについて」という部類の(1)として、「心配事や愚痴を聞いてくれる人」がいない、もしくはいないと答えていない人ということで分けてみました。これについては、全体では「いない」と答えていない人が92%、一人暮らしの方は「いない」と答えた人が88%、何がしか相談する人は結構いるというところで、全体の母集団との差はあまり感じられないかなというのが事務局としての判断です。

1枚めくっていただきまして2ページ目、毎日の生活について、一人暮らしで人とのやり取りがもし少なかったとしたら物忘れ等の心配が出てくるのか、あるいは物忘れに自分で気づかないかというようなことがあるのかということで比較してみたんですが、

こちらの「物忘れが多いと感じますか」、これは、全体が集計の無効回答が入っているかどうかのところがあると思うんですけども、4,592名になっているんですが、ここのところが、物忘れが多いと感じている人45%、いいえと答えた人が53%、下は一人暮らしの方で、物忘れが多いと感じた人が47%、物忘れが多いと感じていませんという方が50%ということですので、一人暮らしかどうかというところで大きな差は母集団と比較した際に生じていないのではないかと。

以下、問4の毎日の生活についての請求書の支払いというところでは、これは少し差があったようで、請求書の支払いについて、「できるし、している」という人が86%が母集団の回答なんですけれども、一人暮らしの方は「できるし、している」が95%と。当たり前と言えば当たり前なんですけど、同じ世帯内の誰かに任せる人がいるかどうかでここが変わってくるのかなということ、実際に母集団では、請求書の支払いはできるんですけども自分ではしていないよという人が10%程度いるんですけども、一人暮らしの方になると3%程度に減っているというところがありますので、そのところで差が出ているのかなと。これは世帯の構成で如実に出てくるのかなということ。

また1枚めくっていただきまして、同じく毎日の生活についての預貯金の出し入れ、こちら、全体の母集団としては、「できるし、している」が84%、一人暮らしの方で言うと「できるし、している」が93%となります。やはりこの差の部分も、「できるけどしていない」が全体では11%だけでも、一人暮らしの方は、預貯金の出し入れをできるけどしていないという方は4%程度というところなので、ここも、ほかに任せる人が世帯内であると違ってくるということかと思われま。

もう一枚めくっていただきまして、「生きがいがありますか」という設問なんですけど、こちらについては、生きがいについて、生きがいがありますと答えた方が全体では48%、一人暮らしの方で45%。生きがいについて、思いつかないという回答をした方が、全体で26%、一人暮らしの方で26%と、ほとんど差がないのかなというふうに見て取りました。

というところが、一人暮らしかどうかというところでの観点で、事務局で幾つか見てみた比較対象というところがございます。

また資料9に戻ります。資料9の、先ほどあった「フレイル予防」というところの次に、丸ポチで言うと下から5番目、特に社会参加との相関関係がわかるとよい。地域活動への参加と健康状態、幸福度とのクロス集計をしてみたい。また逆にゆううつな度合いとの相関関係も知りたい。そして、地域活動に参加していない人や外出を控えている人の理由の分析も必要であるという意見もいただきました。

経済状態は、回答が本人の主観によるので実態はわからないが、高齢者の生活実態との相関関係は相当程度あるはずであるという意見もいただきました。これについては、年金の所得等であれば高齢者支援課である程度は把握できているのですが、預貯金とかその他の財産関係はわからないので、最終的にどれぐらい分析できるか、アンケート調査で預貯金まで答えてもらうようなアンケートをするかどうかという問題はあるかと思うんですけども、まあ、意見として、経済状態というのがもっとわかるものがないのかといったようなご意見をいただきました。

その次、食についての状況把握はとても大事なことで、食べることと健康状態の相関関係が知りたい。誰と食べているか、食べこぼしやむせることがあるか、また助け合いとの相関関係などから見えてくる状態像があるかもしれないというふうにいただきました。ここのところはまだできていないんですけども、今後取り組んでいけたらというふうにご検討をお願いします。

そして、調査の分析、個別事例の研究といった、全体と個別の重層的な視点が大切であるという意見もいただきました。これは、個別事例というのは、ニーズ調査は一人一人の記名で回答していただいていますので、そういった方の気になる事例等があれば深掘りで調査することができるのではないかと。特に要支援の認定を受けている方は、今現在で言うと1,000名ほど、このニーズ調査の時点でも800から900名程度はいたはずですので、要支援の方ですと、認定調査を行う際に、実際に対面での調査を行ったり、身体的な調査、あるいはその後で介護保険や総合事業を利用する際の、どんな生活的な課題と目標があったのかといったようなところも一人一人個人であれば調べていくことができるので、そういった個別事例の研究というのもつなげることができるというご意見をいただきました。

資料9、裏面に移ります。「地域ごとに、どのような状態の人がどこに住んでいるのかということがわかれば、地域の中での助け合いにもつながる。現状は災害時等の備えたリストを市が持っているが、平常時にそれを活用することは、現状では難しい。いずれはそのようになるとよいが、それまでにはさまざまな段階を経る必要があると考えられるということで、地域で高齢者の支援をしていくというときに、お一人お一人の困り事が把握できないとなかなか支援は難しいというのは当然と言えば当然というところなんです。市でそういったお一人お一人の実情を、ある程度、要支援の認定のついての方などはわかっていたりするわけでございますけれども、それを地域での助け合いというところまでフィードバックするには、個人情報保護といったようなルールをどうやって解釈してどのように運用していくのかと。現状はそのままいきなり地域の方にその情報を開示できない部分もあるということがございますので、そういった意味ではさまざまな段階を経る必要があると考えられるということで、こういったご意見をいただきました。

おおむねそのときの検討部会のまとめとしましては、介護保険運営協議会でも、独居高齢者の生活実態の課題を抽出するために、どのような設問の組み合わせでクロス集計をしてみたいかといった意見を出してもらい、その結果を踏まえて今後の施策展開に向けて検討を進めていきたい。

そして、運営協議会の検討結果は、現在の第7期計画期間中の独居高齢者における包括的支援の施策展開や、次期、これは、平成で換算すると平成33年、令和で言うと令和3年度からということなんです。その8期計画の策定に向けて、今年度実施するニーズ調査の追加項目に反映することができるというように検討部会での議論となりました。

以上、雑駁ではございますが、検討部会において行われた議論の内容の報告と資料の説明とさせていただきます。今日の運協では、皆さんのほうで見ていただいた資料で、こういったことができないかであるとか、こういった設問内容はどうかというようにご意見等をいただければ、あるいは、こういった調査ものっていないんですかといったような質問でも結構でございますので、活発なご意見、ご議論をいただければというふうに思っております。

以上でございます。

【林会長】

ありがとうございました。

5月16日に開催しました検討部会について報告をしていただきました。そして、特に独居高齢者の生活実態を詳しく見ていこうということで、この日常生活圏域ニーズ調査がどのように使えるかということについてのお話をさせていただきました。

議題として、3番目に、独居高齢者の包括的支援策の検討についてというのがありますが、それは……。

【事務局】

今、検討部会についての報告をさせていただきます、資料のほうも6番から8番、あと10番という追加の資料も出させていただきましたので、そういったこの資料をごらんいただいて、支援策につながるような統計をどのようにして考えていくかといったような集計方法や項目等について、ご意見やアイデア出しをいただければというふうに考えておりますので、そこは次第の3番というところでご議論いただければと思っております。

【林会長】

ありがとうございます。

ということで、議題の3はこの後やりますので、まず議題の2のところを検討部会報告、そして平成28年の日常生活圏域ニーズ調査の分析に関しまして、質問ですとかご意見をいただきたいと思えます。いかがでしょうか。石田委員。

【石田委員】

資料8の調査概要、ポチの4つ目、「回答者のうち、単身世帯の別」とあります。そして調査票のほうの問1では、例えば4で「息子・娘との2世帯」という項目があります。単身世帯というのは一人暮らしのことを言っているのでしょうか、それとも、娘や息子と2世帯も入っているのでしょうか。

【林会長】

はい、事務局。

【事務局】

こちらは、一人暮らしという選択肢を選んでいただいた方を単身世帯というふうに捉えておりますので、ここは、調査票の問1の(1)の家族構成というところで息子さん、娘さんとの2世帯というのを選んだ方は入れてはいないということでございます。

【石田委員】

はい、わかりました。

【林会長】

ほかにいかがでしょうか。大井委員。

【大井委員】

大井です。この検討部会ということかは外れるかもしれないんですけども、まず2ページのリストの件なんですけれども、これは考え方なんですけれども……。

【林会長】

リスト、どれでしょう。

【大井委員】

資料9の検討部会、「リストを市が持っている」云々というところで、これは考え方で、これに触れるんじゃないんですけれども、多分これは、どの人がというよりも、いろいろなワークでどういう人たちを助けるとか何とかという、町内会なり、あるいはその周りの中で、マークする人がその中に自然に出てくるんじゃないかなという気がしていて、そういうような積み上げ方というのがあるのではないかなと。必ずしも調査だけではなくて、出してもいいよという信頼性という、そういう問題と、その一般の公開とのギャップ、それは攻め方、やり方なんですけれども、多分そういうような視点を持たないと、一方でかたくなに、単に情報とか何かやっている、しかし信頼で、困ったときこうなんだよということが理解されれば、あるクローズした中で信頼性が出てくる、そ

うというようなやり方というのは大事じゃないかなというふうに感じています。この設問とは違うんですけども、設問というのかな、このリスト云々のところで、どうなのかなというのは、多分さまざまな段階を経ると、そういう考え方が要るのではないかなというふうに思っています。

あと質問の追加といえますか、こんながあるといいんじゃないかなという意味では、独居とか、あるいはそういうもので、種々の情報というのはどんなところで得ていて、あるいは老人会とか、そういうところへ入っているのか入っていないのか。入っていないなら、なぜ入っていないのか、あるいは市の説明会に出たことがあるのかなのか、あるいは出たとしたらどんなところが不満だったのか、不十分だったのか、そういうたくさんいろいろなPRをやっている中で、そういう気持ちというものを反映させられるんじゃないかなと。

よく見ると、とにかくペーパーはたくさんありますね。それが逆に言えば十分必要なところに行っていないと。そういう意味で、この調査のところでもそういうのが抜き出せるようにすると、意思を持って、じゃあ、どういうところに潰せばいいんだとか、そういうことができるんじゃないかなという意味で、僕はどうやって啓蒙するかということがものすごく大事なことだと思っているので、そんな点から、この大変なデータの中で感じました。

【林会長】

それでは事務局、お願いします。

【福祉総務課長】

福祉総務課長の関と申します。

まず最初のご意見といえますか、災害時に備えたリストを市が持っているというところで事務局のほうから補足させていただければと思いますが、これは、今、防災課と、それから福祉総務課のほうで、今年3月から避難行動要支援者システムというものを導入しまして、高齢者の方、介護度の認定を受けている方ですとか、障害をお持ちの方、あるいは難病の方、その方に対して郵送で、このシステムへの登録をお願いしている文書をお送りさせていただきました。今、徐々に登録を希望する方の返信がありまして、今、福祉総務課のほうで登録希望の方の入力作業、住所ですとか、お名前ですとか、こういった状態なのかとか、そういう基本的な情報を入力しているというところなんです。

ただこれは、このリストの登録をただで済ませただけで完成するものではございませんで、この先に、災害時にどのような支援が必要なのか、こういった避難が必要なのか、そういったところも、できれば個別計画までつくっていきたい。ただ一度に進めるのはなかなか難しいということなので、今は対象者の方のリストへの登録というものを進めていると、そういったところにあります。

そういったものを、今、市がつくりつつありますけれども、災害時にはこういった個人情報、災害のときには活用するというか、それに基づいて避難行動、支援が必要な方を支援していくという方法はあるんですけども、じゃあ、平常時にそれをどういうふうに使っていくのか。そのあたりは、地域の方に使っていただくのか、個人情報の絡みもありますので、今、なかなか難しいところにはありますけれども、一旦は市のほうで集約させていただいた上で、どのように活用していくかというのを今後考えていくといったところがございます。といったところをお知りおいていただければと思います。

以上でございます。

【林会長】

ありがとうございます。

事務局、お願いします。

【事務局】

先ほどの大井委員の2つ目の質問、ご意見というところなんですけれども、老人クラブ等、地域への参加の部分がどうなっているのかというお話なんですけれども、そういった地域への参加についての調査を行うということだけではなくて、何かもうちょっと掘め手でデータが集められないのかというようなお話ということでもよろしいのでしょうか。

【大井委員】

はい、そうです。

【事務局】

そうすると、今、お話を伺って、私が考えるとしたら、各地域の地縁団体への参加者について、こういった画一的なニーズ調査等の調査とはまた別に、各地域で活動されていらっしゃる団体等に参加されている方を間接的に把握していくといったようなイメージでやっていけばいいのかなというふうにも考えられるんですけれども、そういった意味では、今、老人クラブへの補助金事業もやっておりまして、おおよそ1,200名の方が老人クラブに参加されているんですが、そういった方の定期的な、年1回ではあるんですけれども、会員名簿の提出等も補助金の申請の際にいただいていたたり、あるいは自主的に介護予防活動等に取り組むグループについての補助金等の事務の際に、こういった方がいらっしゃるのかというのは出しておりますので、そういったときに、まあ、それだけですと住所・氏名というだけになるんですが、何か行政に対するリクエストなのか、あるいは、こういったものがあつたらいいなというのを、そういったグループの方から聞き取れば、またちょっと変わってくるのかなというふうに……。

卑近な例ですと、同じ老人クラブ、全部で二十六、七団体あるわけなんですけれども、それぞれのクラブで独自に活動していく部分というのがありますので、こういった取り組みをして地域の会員の人に参加してもらっているんだといったような話を聞いていくと、やはりサロンの活動をしていきたいと考えて、会費を使ってカラオケの機械を導入して、みんなでそれを楽しむという形で、老人クラブに1人でも多く参加してもらいたいという取り組みをやっているところもありますし、またあるいは、そういったもののほかに、逆に相談事として、どういうふうに活動していけば若い高齢者を引き入れられるのかなといったような相談を受けることがありますので、そういったところから、地域の方の情報あるいは困り事、課題、そういったものが入れられないかというふうには私どもも取り組んでいきたいというふうに思いますので、逆に、今度はそれをどうほかの分野の方にフィードバックしていったらいいのかというのを検討していきたいというふうに思います。

そんなところでございます。

【林会長】

大井委員。

【大井委員】

補足でよろしいですか。この個別の調査に加えるとかいうことではないんですけれども、当然おのおのに温度差があるし、いろいろなやり方があるとは思いますが、ただ、全体的にこういう目的を持っているところを、今の自治会なり老人会というのは、多分、持っているところもあるし、持っていない、まあ、非常にばらつきがあるから、その辺のところを、市長がおっしゃっているインクルージョンで言うのであれば、やっ

ぱりそこまでが組織的にやる一方で、それから我々が入った活動とか、そういう中での盛り上げをする、その両方をマッチングしていけると思うんですけども、それが、今、片方がないんじゃないかと。ほんとうにでこぼこになって何とも言えないんですけども、だからこの話は、行き着くところ、それだけ孤独の人とか、どういう人をどれだけ見ているんだという、そういう意識の持ち方が全然違ってくるわけですね。その草の根の部分をやらないと、それは統計じゃなくても、かなり定性的に見えることはたくさんあると思うんですけども、そんな視点でお願いします。

【林会長】

ありがとうございます。

では、部会長をしていただいた新田先生から。

【新田委員】

先ほどから第1回の、事務局が何を言ったのかという議事録を見ていて、それで、何でそれを見ていたのかというと、いきなりこの一人暮らしの日常生活等々が出てきましたね。大井さんの言ったのは僕はもっともだと思って、第2回の介護保険運営委員会で何をやるのかという話だと思っただけなんです。第7期介護保険計画をつくり上げて、その検証と、それと同時に、第8期のときにどんなことが起こっているんだろうなど、国立で、それについて、介護保険運協が何を目的でやるのか、その中の個別論の1つが独居であり、大井さんの言われる、地道に地域の活動から何を見ていくかということで、そのところが何も話されていなくて、いきなり独居生活の、日常生活の何とかという話になると、一体何から始まったんだろうなという思いがするのはもっともなことだろうと。先ほどの、もう一つ、関さんの話も、さらに個別論の話になってしまって、そんなの次の次の話ですよ。

ということで、今、私たちの国立で起こっていることは、大井さんのところのひらや照らすというようなところで、ほんとうに地道に、地域にいと見えてくるわけですね、どんな生活をされているのか。ということは、例えば独居だけじゃなくて、老々家族もあり、その中で介護保険の保険だけではやっていけない方たちがかなり多くいるというのも現状だろうと。この介護保険が、さらにそのあたりまでを包括して考えるシステムを考えるのかというのがまず1つありますね。

あるいは、介護保険運営協議会は、あくまでも要支援を含めた介護保険内の話をするのか。あるいは要支援1・2への移行をするための介護予防についてまでもここで話すのか。さらにもう少し言うと、介護保険というのはほんとうに生活支援になっているかどうか。さっきの高齢者の一人暮らしの話は介護予防の話ですよ、一方で言う。この人たちを捨てない、この人たちを地域できちっと助け合っていくという、こういう話で独居高齢者というのは話題になったと思うんですが、そのためにどんな生活でどんなことができているのか、それでどういうことがだめなのかということ进行分析して、だめだったらこういうシステムをつくりましょうという中に位置づけるとか、その基本の話ができていない中で、第2回目に、何かいきなりこれが出てきて、まあ、いいことはいいんだけど、内容としては悪くない話だけれども、いきなりはないだろうなというのがありまして、そこをもう少しまとめて、トータルの計画の中の1つの視点としてここにあるよということをお互いに一致していただければというふうに思います。

【林会長】

ありがとうございます。

それでは、確かに個別のところ急に急に入り過ぎてしまったので、この運営協議会として何をしていくかという基本的な方向みたいなところを話し合えたらいいのかなと思

ます。

大井委員。

【大井委員】

よくわからないと言っではいけないんですけれども、まず、今、ここにある国立の地域医療計画、例えばこれを1つ例に挙げて言います。これは非常に立派になっているんです。ただ、市民として見ると、これは、要するにまとめ方の問題ですよ。市民の人に啓蒙しようとした場合に、やっぱりわかりやすさというのが大事だろうと思うので、まとめ方として、提言で言えば、せめて1ページから2ページにガイドが出ていて、それであるとは詳細がつくと。そうしないと、これは誰も見ようということにはならないので、そういうような攻め方をお願いしたいなというのがこれを見ての感じです。

なおかつ、これを読んでいって、確かにどこかに書いてあるだけけれども、何が問題で、何をして、どう改革して、どう進めるんだという、それが相当読まないと見えてこないし、そこは、こういう説明というのは非常に大事だろうと思うんですね。それをこれから感じました。

簡単に言うと、これは全部共通しますけれども、じゃあ、一体今までは何が問題であって、どんな課題があって、これの中ではどんなアクションをとろうとしているのか。それで国立らしさというものがどこかに出てくれるといいんですけれども、それは何だろうかという、そういうのがわっとキーワードでざざっと入ってくると、あとそれから詳細や説明とかが入る、それが啓蒙の非常に大事なことじゃないかなというふうに思いました。

あと、私もパブリックコメントで大したことはしていないんですけれども、せっかくパブリックコメントをしたのに、この中で、最後のページでたった2行で13件30名、うーん、ちょっとそれは、これを見たらパブリックコメントをした人は怒っちゃうんじゃないかなという。感覚で言えば、出たんだ、全部できないものはありますよ、たくさん。せめて出たものを、ここは出たけれども、これは検討したけれども無理だよとか、そういうコメントつきにしながら、あるいは補足でもいいですけれども、何かそのぐらいいのは欲しいなというふうに思いました。

あとこれは、我々の中で話し合った中で出た雑音の1つですけれども、当然、こういう医療という難しいものを素人ができるわけがないので、ただ、このメンバーの人たちを見ると、皆さん、お金を払う・もらうという言い方はないんですけれども、見る側の視点というものを、要するにメンバーがいないという意味で、それを、その視点というものを、無理かもしれないけれども、次、もしやるときに、そういう人を選んでもらうといいなと。認知症の方のときでも、当事者の目線であることを、この間、新田先生がやられたときもかなり話されていましたよね。やっぱりそういうところが一つ一つの、そういう簡単なものじゃなくて、プロの人は皆さん知っているところでも、僕ら素人としたら、いろはから全部これをやらされたらかなわないかもしれない。それは素人の市民の目だろうと思うんですね。そんなところを感じましたので、すみません。

【林会長】

はい、どうぞ。

【新田委員】

いきなり地域医療計画でございますが、つくった責任者の1人として、大井さんの意に添えなかったのはまことに残念でおわび申し上げますが、言われるとおり、なかなか難しいですね、正直言いまして。医療計画なるものというのは、大井さんはもともとご存じで発言されていると思いますが、もともと統計報告ですよ、多くは。国も、都道

府県も、統計報告の中で、こういった国立が市町村としてつくるにはどういったらいいのかなという話で、めいっばい市民の中に入り込むような目線をつくったつもりですが、それでもやっぱりそういうような意見になってしまうというのは、これも、おわびを申し上げますと同時に、うーん、さてという話を考えております。

それで、もちろん、おそらくこれ以降つくられる医療協議会は、市民の人たちのメンバーが何人か入り込んで、今までは専門部会に近いものでしたが、そういったような協議会になるというふうに聞いておりますので、それはそれで、その大井さんの意見には添えるだろうなというふうに思っています。

そしてまた、そこの中の細かい点に書いてありますが、今後の方針ということで、一步一步、市民にわかりやすく、ガイドラインというよりは、まあ、最初はガイドラインみたいなものですね、それを含めて一步一步、そこの中を進めていくのが、これを今後2年間、まずやらなきゃいけない作業なので、またその努力にご協力のほどをお願いしたいというふうに思いますが。

【林会長】

ほかにいかがでしょうか。

では、事務局、お願いします。

【事務局】

今回、平成28年度実施のニーズ調査について、世帯構成によって何か差がないかとか特徴がないかということで、資料ナンバー10番の円グラフの資料をつくらせていただいたんですけども、私はこれをつくってみて、正直、世帯構成だけで劇的な違いというのはあまり見られなかった。あるとしたら、先ほどちょっと申し上げましたけれども、預貯金の出し入れとか、あるいは請求書の管理とかというところをお願いする家族がいるかないかというところで、資料ナンバー10番の3ページとか4ページについて、円グラフが、見た目、ちょっと変わるかなといった程度でしかなかったの、さらに押し進めた分析というのもやってみたいとは考えているんですが、正直、これは実際に生のデータをいじって、フィルターをかけて人数を出してみたとやってみた中では、単発の1回分のニーズ調査で云々というよりは、この調査が生きてくるのは、これは3年に1回のニーズ調査なんですけれども、そのほかに、ニーズ調査をやらない年に実施している、調査項目がかなり重複している自立度アンケートというアンケート、それとあわせて、1人の市民の方が毎年どう回答して、その方の状態像がどういうふうに動いていったのかというのを捉えていくといったような考え方のほうが、比較的元気な人の調査ものとしては生きていくのかなというのがやってみた実感でございました。

もちろん検討部会でご意見をいただいたようなクロス集計の、憂鬱の度合いと健康状態や幸せを感じる幸福度、そういった分析というのももっと進めてやってみたいというふうには考えているんですけども、それと同時に、同じ回答をした人が、今後、何年かたっていったときにどう変わっていくのかというのを、これは単年度の自立度アンケートや3年に一度の単発の調査じゃなくて、データベースとして蓄積していったときに初めて価値がより出てくるのかなというふうなことを、担当として、実際にこのエクセルのデータをいじっていて感じましたので、どれだけうちの事務局のほうでその統計分析できるスキルがあるのかといったようなところもありますけれども、このデータは大事に蓄積していけたらなというふうに感じております。

事務局でやった一担当者の感想としてはそんな感じがしました。

【林会長】

ありがとうございます。データとしては非常に貴重なデータだと思います。ただ、事

事務局と、この介護保険の委員との間で、このデータというか、調査についての理解度のギャップというのがかなりあると思うんですね。事務局のほうでは、もちろん、この貴重なデータを使って、それが政策にどう生かせるかということで徹底的にいろいろな分析を進めていらっしゃるって、わかったところとわからないところと、いろいろとあって、これからはこういったところもというような、そういうご発言があると思うんですね。それは当然なんです、ただ委員の中で、そのようにこの報告書を読み込んだ人はいないし、それから、こういうデータって、自分でいじってみるっていうのかな、自分でちょっと集計してみないとなかなか理解しにくいものなので、それは誰もやっていないと思うんですね。

ということで、事務局としては、こういう集計が必要だとか、こういう分析が必要だというのはどんどんやってほしいんですが、この介護保険の運協の委員のレベルでは、もうちょっとハードルの低いところで、ここがわからないんだけどとか、そのあたりから徐々に、こういう集計が必要なんじゃないかとか、ここを分析したらこういうことがわかるんじゃないかということがだんだん出せるようになっていくかと思うので、そんな感じで、事務局とレベルが違うということをご理解いただいて、それを前提に、もう少しこの議題で話し合ってみたいと思います。

ということで、どんな素朴な質問や意見でも結構ですので、この資料と、それから事務局の説明をお聞きになって、ここを聞いてみたいというのをどんどん出していただきたいと思います。

山路委員、どうぞ。

【山路委員】

特に男性の一人暮らしの方で、自分の食事を用意しているとか、掃除機やほうきを使って掃除をしているみたいな、そういうのって、多分、今までずっと一人暮らしできたのかとか、あるいはご夫婦で暮らしているときにそういう家事を教えられたかとか、何かいろいろな、そういう暮らしの流儀とか、多分そういうのとかもすごく反映されているのかなと思うと、この報告の中の一番最後のところに、調査分析で、個別事例の研究といった、全体と個別の重層的な視点があったらいいんじゃないかというのが書いてあったので、多分そういう質的調査というような視点の部分も特に必要になってくるのかなとは数字のデータを見ながら思いました。

【林会長】

ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。はい、大井委員。

【大井委員】

簡単な質問です。地域活動と主観的健康観、このグラフの、下の回数の、ポイントついていない、健康度は、これはさっきの1、2、3か何か、この回数の部分が、地域活動の回数／週というのは、30とかというのが出るのは……。

【林会長】

このスコアがどのようにして計算されているかということですね。事務局、お願いします。

【事務局】

こちらは、地域活動の回数が1週間あたりおよそ何回というふうに回答していただいているかというところでございます。この地域での活動についてというのが、資料7の調査票で言いますと11ページ目の問5(1)「以下のような会・グループ等にどのくらいの頻度で参加していますか」という、この質問でございます。7つの、ボランティ

アグループ、スポーツ関係のグループやクラブ、趣味関係のグループ、学習・教養サークル、老人クラブ、町内会・自治会、収入のある仕事というふうになっていまして、この30回近く地域での活動をしていると回答した方というのは、おそらく週4回以上の参加というのを、ボランティアも、スポーツ関係も、趣味関係、学習・教養、老人クラブ、町内会・自治会、収入のある仕事、7項目全部で週4回以上出ているという、単純計算ですと28回出ているという計算になって、はっきり言って、これは4,000人ぐらいの回答をいただいているという方の中での回答なので、これが28回というのはほとんど異常値に近いものではあるんですけども、今回、まだその異常値を取り除くところというところまで行っていませんので、逆に言うと、この異常値を取り除くのか、それともほんとうにスーパーマンのように毎日、1日に何度も何度もいろいろなところを回っている方なのかというのは、その回答をした人の調査をしてみないとわからないというところもありまして、実は、すみません、ここのカラーのグラフなんですけれども、私がいま一つ分析ソフトに精通していないので、ほぼ完徹の状態です。今日、ようやく、ある程度、相関性のある出し方が見つかったというような感じでやっておりますので、すみません、異常値の除去というところまで行ってないというところがありますので、集計で、これは確かに1週間当たりの回数が多過ぎるなど私も感じているんですけども、実際のところはどうかというのはこれからまた確認していきたいというふうに考えてございます。

以上でございます。

【林会長】

個別に言えば、大井さんの回数は幾つですか。

【大井委員】

いやいや……。

【林会長】

大井さんの回数は、個別で言えば異常値じゃないですか。

【大井委員】

個人より、これは全体として平均はどんなもんかのほうがむしろ……。

【林会長】

課長が徹夜でつくられたグラフだそうで、これを、今、見ながら話ができたらと思うんですが、まず予測値という言葉が、これが何か説明していただけますか。

【事務局】

この予測値と出ているのは、今回、主観的健康観につきましては、大変よいであるとか、まあよいであるとかといったような4つの段階で回答していただいているので、実際の回答は、この青の点、一番よいと言った人を数字を大きくして4としています。実際の調査票では、一番いいというのが1となっているんですが、1の場合を4に置きかえて、ちょうど回数が増えると健康度についての数字も上がるというような仕掛けにしたいと設定しているんですが、健康がいいですよという、これは問7の(1)で「とてもよい」という回答、1を選んだ人を4として、「まあよい」と回答した人を3、「あまりよくない」を2、「よくない」を1というふうに設定してございます。

実際の実測した観測値というのは、実際にいただいたアンケート票は、この1、2、3、4のどれかに乗っかるということになるのでブルーの点、これがYとなるんですが、これを地域活動の回数と関連づけて考えたときに、実際に5回と答えた人よりも10回と答えた人のほうが比較的良好な健康状態を答えているんだというふうな傾向があったときに、これを統計手法で言う回帰分析というのがあるんですが、平均的にこの活動回数

を、答えとしてはどれぐらいの主観的健康観を答えているかというのを関連づけて計算をして出したものというのが予測値というふうになってきます。

ある程度の計算式を捉えたところで、そこに対して、実際に、じゃあ、この活動回数が入ったら、どういう健康観によるスコアが出るのかというふうに出しましたので、実際には、活動回数を10回と答えた人は、3と答えた人が例えば100人いるとか、4と答えた人が150人いるとかといったような実測した観測値になるんですけども、それを数式に当てはめたときに、10回と答えた人が大体何回なのか、あるいは、もしこれが10.5回と答えた人等はどれぐらいになるのかという予測した計算式に入れた場合の主観的健康観のスコアがこれぐらいになりますよというふうな分布が、このオレンジの点ということになりますので、数学的に出した計算式に、地域活動の回数が何回だったら、この式に当てはめたら何点ですよというふうに答えるかというのをプロットしてみたというのがこういったところで、もちろんそれぞれの人の回答というのはばらつきがありますので、同じ10回と答えた人でもばらつきがございますので、そういったばらつき度合というのがこの予測した値にも出てきているというふうに解釈していただければなというふうに感じてございます。

ちょっとわかりづらくて申しわけありません。

【新田委員】

いや、わかりづらいわかりづらい。ほとんど回答になっていないと思う。なぜかといいますと、市民が望んでいるのは、私たちが計画するのは、週に2回とか3回、具体的に外で活動できれば健康がありますよとか、主観的健康、あるいは健康で維持できます、そういう具体的な回答ですね。今のは数学的回答だよ。

【事務局】

そうですね。

【新田委員】

分析回答なので、私たちが出す回答は、やっぱり必要な、ほんとうに健康な人は少なくとも週に2回外へ出てくださいとか、あるいは2回じゃ足りない、週3回出てくださいということをここでは決めていかなきゃいけない、せつかくの数字ですから。というのは、これは、僕は独自の国立の調査でいいと思うんですね。その結果、国立の調査では、週、具体的にこうやって出ていた人は健康だったというのであれば、その週3回出るためにどうすればいいのかということをつくり上げるという、もっとシンプルに考えたらどうでしょうかねと思いますが。

【林会長】

ありがとうございます。

ほかに。小林委員。

【小林委員】

僕は2回目で、わからないことが多くて申しわけないんですけども、高校の教員で、生徒を高齢者施設に送り出したりとか、そういう中で聞く意見とかも踏まえて考えるんですけども、一応、この会自体、私自身が思うのは、要介護・要支援の運営協議会なんですけれども、当然予防というの、今、ものすごく力を入れていかなきゃいけないですし、国立としても、予防と支援と要介護が連動した支援を検討していかなきゃいけないと思うんですね。

そのときに、たまたまこの独居の話が出たときに、当然、孤独死というか、そういったことも、心の健康ということでもあると思うんですけども、この資料の間2の8のところのトイレの心配というのは、実は私は、2番目の数にはなっているんですけど

も、このところをもうちょっと丁寧にしたほうがいいんじゃないかなと思っています。

それで、足が痛いから外に出たくないとか、さまざまな状況があると思うんですけども、やはり高齢者の方、水分補給を小まめにしなさいといえども、やっぱり排尿・排せつ、このあたりが非常に不安だから出られないとか、または痔であったりとか、そういった部分があるから出られないというところの部分、もうちょっと丁寧に調べたほうが、出たいという気持ちのところの部分に、排せつ・排尿があるから出たくないというところの部分が多いいんじゃないかなというように思います。これは実際に生徒が、高校生が、外に散歩に行きましょうという、それがあるから出たくないというのが非常に多くて、それがすごく困っているところがあったので、そう思いました。

あとは、この検討部会のところの「特に」というところの後ろのほうなんですけれども、幸福度とか、さまざまあるんですけども、やはり生きがいの創出というところの部分が、当然、予防、支援、介護につながっていくと思うんですけども、そこに対しての、もうちょっと情報を入れるのほうがいいんじゃないかなと思うんですね。例えば幸福度の、生きがいの創出の中に、お祭りがあったり、孫があったり、イベントがあったりとか、あといろいろな観戦、観劇があったらというものがあったりとか、あとは小中高生との交流体験みたいなものとか、あとは、自分自身が仕事を頑張った、職人さんであれば得意なことを子供たちに見せるとか、またはそういう充実感ですね、そういったところがあれば、また出てくることも増えてくるんじゃないかなというのがあります。

あと、口腔ケアの実態というのも兼ねていかないとううなのかなと思います。

あと、実際の今の高齢者の、多くのお年寄りの人たちのニーズというのは、ある程度、同じだと思うんですね。昭和の20年、30年で、みんな同じテレビを見る、みんな同じラジオを聞くというところの部分で共通があったけど、それはビートルズだったり、洋楽だったり、演歌がどんどん変わったときに、先ほど言った第8期ですか、令和3年とかの部分だと、ほんとうに多くの人々のニーズがものすごく変わってきたときに、その中での生きがいの創出というのを考えていくのはものすごく大変なことなんじゃないかなと思うんですね。

あとは、ちょっと卑近な例ですけども、見たいテレビとか、ケーブルテレビとか、そのあたりの部分も何かあるといいんじゃないかなと思います。例えば韓流ドラマが見たいというの、そういうのを見るケーブルテレビがあれば、じゃあ、それで行ってみたいと、旅行につながったりとか、そういうことも、行くものもあると思うので、その気にさせる施策というものに対して、もう少し情報分析をしっかりしたほうが、もう少しいいのではないかなというふうに感じました。

あとウォシュレットとか、そのあたりの介護用品の部分のところの、やってみての実感とか、その辺なんかもあると非常に価値のあるものになるんじゃないかなと私は思いました。

以上です。

【林会長】

ありがとうございます。いろいろな要望を出していただいてありがとうございます。

ほかにはいかがでしょう。はい、関戸委員。

【関戸委員】

要介護とかになっていないんですけども、なっていない対象者だから、ほんとうは全て健康な人ということになるんでしょうけれども、外見的にあらわれないものとして、引きこもりというものの実態をつかむ必要があるのではないかとあって、外出を控えていますかというのだけで、これが、外出していないというだけで引きこもりとは言えな

いので、何か外出しないこととプラス、そういうほかの地域活動にも加わらないという、そういうことを組み合わせた形での、生きがいを感じない、そういう引きこもりという人の類型がわかるようなアンケートが必要ではないかなと思っています。

【林会長】

ありがとうございます。

貴重なご意見だと思うんですが、どのように把握されているんでしょうか。事務局、お願いします。

【事務局】

今日お出しできていなくて申しわけないんですけども、実はこの介護予防・日常生活圏域ニーズ調査の実施報告書、皆さんお手元にご覧いただけますか。

【林会長】

あります。

【事務局】

はい、そうです。そちらの、すみません、16ページなんですけれども、この調査の中に幾つかの設問を用意しておりまして、それは国のほうで示している設問と同様の内容も実はこの中に組み込まれておりまして、その幾つかの設問から割り出した、閉じこもりの予防が必要だという該当をする方々がこれだけいらっしゃるというようなことも、実はここから読み取れるということになっています。この方々は、従前と言う特定高齢者と申しますか、このまま放っておくと要支援状態になる懸念があるというような方々とほぼ同等でして、その方々に対して市のほうからご連絡を差し上げて、介護予防事業に参加しませんかというお誘いをしているというようなことになっております。

ただこれは、おわかりのように、回答してくださった方々に関しての該当者ということですので、さらに掘り下げると、回答していただけなかった方についてはもっと閉じこもりの懸念があるのではないかとということも推測されますので、そのあたりも含めて、実際に、今ある既存のいろいろなデータと組み合わせて、あるいは訪問している記録と組み合わせて、なるべくこちらのほうからもそういった方々を掘り起こしていくというような努力をしている最中ということになります。

以上です。

【林会長】

ありがとうございます。

そうですね、この分厚いものの3ページのところに介護予防事業対象者を判定しているところがありまして。はい、関戸委員。

【関戸委員】

これの数字で、その該当と言っているのは、そうすると何か本人の申告か何かがあったということなんですか。それとも何か別の。

【林会長】

事務局、お願いします。

【事務局】

こちらのほうなんですけれども、基本チェックリストの項目、25項目というのが1つありまして、それがこのニーズ調査の中にも盛り込まれております。そちらの中の項目で、国が示している2つ、週に1回以上外出していますかというところと、あと、昨年と比べて外出の回数が減っていますかという2項目のうち1点以上、どちらかついた方というのが、外出をしていない、閉じこもりの可能性がある方ということになるというふうになっていて、資料7の6ページの(6)と(7)の、この2つの質問項目に

対して、どちらかに該当する方が今回のこの数字にはなっています。

【関戸委員】

やっぱり引きこもりというのは1つの心理的な要因があるので、こういうこれだけでというよりは、もっとプラスアルファが要るんじゃないかなというのが私の指摘です。

【新田委員】

もともとその回収率って結構大変でしたよね。

【事務局】

77%です。

【新田委員】

77%の回答率って、これは結構すごい回収率なんですね。こういった、今、関戸委員のような、閉じこもりの人たちが、この回答をしない人たちが多かったんですね。今は全面、調査に行つてということも含めてやるので、結構拾い上げができてきたんですね。まだそれでも落ちこぼれます。もちろんそこでも閉じこもっている人たちが結構どんどん増える状況にあるんですけども、これでもいい数字だと私は思っていますけどね。

【林会長】

小林委員。

【小林委員】

先ほど、そのときにお誘いをというんですけれども、多分言われたとおり、精神的なもの、さまざまなものがある中での閉じこもりの方々にお誘いをしたというだけでほんとうに予防ができるかというのは、正直……、もちろんインクルージョンに入つていったほうがいいんじゃないかなと思うところがあるので、その、ただやつたところが実際のそれに係るかどうか、ちょっと心配な点があるのを、また別のほうで施策をしないといけないのかなというふうに思いました。

【新田委員】

ちょっといいですか。どこまで施策をご存じかどうかわからないんですけど、今、おそらく第6期で、サロン計画を含めてかなりのことをやられて、例えばひらや照らすとか、いろいろなところでコミュニティ、サロンができていて、そこへ皆さんが集まり合つていくと。石田委員のところもそうだし、国立市で、大井さんに聞いたほうがいいんでしょうけれども、かなりの数があります。そのところが、どこまで有効かを含めて、今、さらに進めているところです。だから、今言われている中で、基礎論は全然大丈夫、いいんですが、さらにどうしたらいいんだろうねという、そういった意見が僕は必要だなと思っているんですね。基本的なことは皆さんもわかっていて、そこにどうやったらそういうのをつくっていけるのかというご意見のほうは私は貴重だというふうに思います。

【大井委員】

今、ひらや照らすが出たので。

【林会長】

大井委員。

【大井委員】

ひらや照らす、究極というのはないんですけれども、引きこもりというか、独居の人たちを、どうやって出してもらおうかなんですけれども、簡単ではないのはよくわかっています。それで、我々がどうできるわけじゃないので、やっぱり口コミなり、それしかないんでしょう。

それで、一応何人かは出ています。1人でも出ればいいのかないという感じがしています。あとそれとは別に、例えば引きこもりの方の家族の会とか、あるいは難病の会の方

とか、そういう話す場を設けて、そこに家族が集まってきて話すという、じわじわとした感じでやっています。

我々はプロじゃないし、わからないし、人の気持ちっていうのはそんなに簡単なものじゃないというのは重々承知なので、ただし我々もその課題は何とかしようとは思っていますけれども、我々だけではできないので、皆さんのお力と知恵というものでやらなきゃいけないなと思っています。

【林会長】

ありがとうございます。

ほかにいかがですか。山路委員。

【山路委員】

おくれて来てすみません。

既に出ている話かもしれませんが、今出た話と関連させて申し上げますと、国立はよくやっているほうだと思うんですよ。ただ、よくやっているからいいというわけではなくて、やっぱりまだまだ、今の居場所、サロンにしたって、1万人当たり少なくとも10カ所ぐらいは必要ではないかというふうに、一般的にというか、厚生労働省のガイドラインのようなことでも言われているので、そういう意味からするとまだまだ足りない。中身もちろん大事ですよ。大井さんのところはほんとうによくやられていると思うんですが。

最初の話に戻るようで恐縮ですが、介護保険運営協議会というのは、これは名前をそろそろかえたほうがいいと思っています。今までは3年に1回の介護保険事業計画、特に保険料を幾らにするのか、サービスの中味については、最初の段階では市町村によってそんなに違いがあるわけではなかったから、そんなに闊達に国立方式を言われるような議論はなされなかったと思うんですね。

それが、特にこの2期・3期、6期・7期あたりから、にわかにならぬ国立独自というか、中身づくりは、国や都から一律に言われた枠組みだけではなくて、地域支援事業、正確に言うと日常生活支援総合事業というのが2015年度から本格的に始まって、今、小林委員が言われたように、要介護・要支援だけではなくて、介護予防、予備軍の人も含めて、高齢者全体をどうやって支えていくのかというのは市町村独自で考えていきたいと思いますという話になってきたわけですね。その中で居場所づくりとか、介護予防とか、認知症対策とかいうことをやらざるを得ないということになっていて、国立は2015年度から本格的に、特に第7期あたりで仲間づくりが始まったというのがこの間の経過ですね。

それで今回の、第1回、今日は2回目になるわけですが、前回開いた検討部会で、一人暮らしの高齢者、独居高齢者というのが出てきたのは、これからますます後期高齢者、75歳以上、85歳以上の高齢者が増えていく中で深刻になっていくのは、独居、10人に4人ぐらいが、おそらくあと20年足らずのうちに独居高齢者は半数近くになるわけですし、認知症の問題も深刻ですよ。その中で、市が独自にどうやって支え合う地域社会をつくっていくのかという、まさに中身づくりを、今、議論している。だから、今までにない、介護保険枠組み以外の地域づくりをこれからやらなくちゃいけないという意味で、今回の第8期の事業計画に向けての議論のスタートがあるんだというふうに私は理解していて、この前の検討部会も、そういう中で独居高齢者をメインに議論したというのがこの間の経過ですよ、今のと重複になって申しわけないんですが。

それから、やっぱり認知症ですね、これから議論しなくちゃいけないのは。そういう優先順位をつけて、やらなくちゃいかなことは確かにいっぱいあるんだけど、それ

を私たちは優先順位をつけて、どういうふうを考えて何から優先的にやっていくのかということ、これからの、この運協の中で、繰り返しになりますけれども、運協という名前をかえないですか。かえたほうがいいと思いますよ。そういう中で議論していくというのがこれからのこの場での課題だということ、ちょっと重複になって申しわけないんですが、あえて申し上げたいと思います。

【林会長】

ありがとうございます。

ほかにご意見、ご質問ございましたらお願いしたいんですが。

大体出たのであれば、今日はこれ以上、あれですかね。

【事務局】

はい、そうですね。

【林会長】

今日は、この議題の3の独居高齢者の包括的支援策の検討ということで……。

【事務局】

次ですね。

【林会長】

ええ、これは次に、検討部会をもう一回挟んで、どのあたりが論点なのかということをもう少し鮮明にした上で、この場で議論したほうが生産的かなと思いますので、そのあたりというか、議題の2番目と3番目は、今日はこのあたりまでにしたいと思います。ということでよろしいでしょうか。

そうすると、残った議題は4のその他ですが、事務局からその他でございませうか。

【事務局】

では、すみません、「いいあるきネット in くにたち」、認知症高齢者の方などの交流活動協力事業所一覧表というのをお手元のほうに資料でお配りしております。これは、認知症の高齢者の方を市内で見かけた際に、一時避難的に保護し、見守ってくれる、今回は主に介護事業所の一覧リストをつくりましたのでご紹介したいと思ってお配りいたしました。

例えば認知症高齢者の方を見かけた際には、地域包括支援センターとか、地域窓口がメインで対応させていただくんですが、市民の方がまちで見かけて、包括がすぐに対応できればいいんですけれども、そういった地理的な問題とか、お仕事に行かなくちゃいけないけど心配な高齢者の方がいてという場合に、身近な、例えば今回、介護事業所などにご協力いただきまして、昨年度、アンケート調査を行って、協力してくださる事業所のリストを今回つくらせていただきました。

今後につきましては、例えば薬局ですとか、もっと数を増やして行って、市内で保護などをしていただける事業所ですとか、そういった場所を今後拾って作成していきたいなというふうに思っております。今回は介護事業所さんにご協力いただきましてこのようなリストができましたので、皆さんにお知らせしたいと思います。

以上です。

【大井委員】

看板は。

【事務局】

今年度は予算がついておりまして、高齢者の見守りネットワークというA4サイズぐらいのシールをつくりまして、協力してくださる事業所さんに張っていただく準備をしております。

【林会長】

ということで、協力事業所の一覧表ができたということですが、何かこれについて質問等ございますか。よろしいですか。

ではもう一つ、今配付された市報ですね。これについても……。

【事務局】

先ほど大井委員のほうから医療計画について少しコメントをいただきましたが、5月20日号の市報1面に、医療計画を策定しましたということで記事を載せさせていただきました。市民の方皆様が望む地域医療の実現に向けてということで、4つの柱、日常療養支援ですとか、急変時の対応ですとか、退院時の支援についてと、あと看取りについてということで、4つの柱で事例を中心にまとめてありますということと、あと計画を手にとっていただくために、事例を、今回、市報のほうにも載せさせていただきました。

問い合わせが、5月20日、市報に載った時点でかなり反響があって、3件ぐらい、市民の方から、冊子が欲しいとか、コメントさせてほしいとか、ご意見をいただきました。実は今年度、毎月1回、6月は6月6日になるんですけれども、市民勉強会という形で、ほぼ毎月、医療計画の説明といいますか、市民勉強会を開催していく予定でありますので、お知らせしたいと思います。

以上です。

【林会長】

ありがとうございます。

地域医療計画についても市報にこのように載ったということですね。市民勉強会も開催されるということで。もし何かこれらについてございましたら。よろしいでしょうか。ほかに何かございますか。お願いします。

【事務局】

今回の運営協議会についてなんですが、先ほど会長のほうからもありましたけれども、一応今後の議論の方向性とか、そのあたりを、一旦、検討会のほうでやらせていただいて、その後という形にさせていただきたいので、次回の日程等についてはまた改めてご連絡させていただくということでご容赦いただければと思います。

【林会長】

ということで、毎月第3金曜ということをお伝えしていましたが、それは、来月、6月はやらないで、議題の整理ができた段階でご案内するということにさせていただきますと思います。

ほかに何かございますでしょうか。

特になければこれで終わりたいと思うんですが、よろしいでしょうか。

では、今日はこれでお開きにしたいと思います。どうもお疲れさまでした。

— 了 —